令和5年度　　福岡市立［ 生の松原特別支援 ］学校　学校評価実施状況（公表用）

めざす学校像・子ども像 ・ 教員像	課 題	今後の改善方策
○児童生徒が喜んで通う学校　○教育環境が整っている学校　○保護者や地域から信頼される学校 ○元気で明るい児童生徒　○最後までがんばる児童生徒　○社会に参加する児童生徒 ○児童生徒としっかり向き合う教師　○日常の活動を大切にし向上心をもった教師　○保護者や社会の信頼に応える教師	働く意欲を高める教育の充実	○小学部段階からのキャリア教育の充実。 ○就労準備性の土台となる基本的生活習慣の確立。 ○小中高の系統だった、基本的生活習慣獲得のためのカリキュラムの精選。
	教育的ニーズに応える学校	○個別の指導計画・支援計画を保護者に提示し、合意を得たうえで教育実践に当たる。 ○ICT機器の活用を主軸においた、テーマ研修および自主研修の実施。 ○応用行動分析学に関する自主研修を設定し、ASDに対して専門性の高い授業展開を目指す。
	安心・安全な学校	○事案発生時の手厚すぎる初期対応と未然防止の取り組み。 ○長欠生徒へ関わり方の共有 ○児童生徒の捜索時における組織的対応。

重点目標	指標（取組指標・成果指標）	達成状況についての説明
自己肯定感・自己有用感の獲得を目指す指導の実施	教育課程検討委員会において、他学部の実践を知る機会を設定する。 校長による、作業学習の目的や就労準備性ピラミッドについて職員研修の実施と外部への周知。 人権教育についての研修会を実施し、教職員の人権意識の更なる高まりを目指す。 職員対象アンケートにおいて「主体的に学びを引き出す授業～」で、「十分できている」の回答10％以上。	・他学部の様子を実際に参観するまではできなかったが、CAシートを用いて、全ての学年の状況を知る機会を設定することができた。 ・就労準備性のピラミッドについては、繰り返し職員へ周知することができた。次年度の学校経営案にも入れ込む予定である。 ・教員対象の研修会を実施し、改めて児童生徒を尊重した呼名方法について、確認を進めた。 ・職員対象のアンケートにおいて、「意欲的に学ぼうとする授業～」の項目で、「十分できている」の回答は、5.6％に留まった。
特別支援学校として、専門性の高い指導の実施	家庭訪問、懇談会等で得た情報を、校務支援システム上において職員間で情報共有する。 保護者対象学校アンケートにおいて「意欲を引き出せているか」で、「十分できている」の回答を45％以上。 ICT活用についての自主研修を5回以上開催する。使うことだけを目的とはしない。 テーマ研修とは別に、自立専科からの情報発信の研修時間を11月までに3回以上実施する。	・児童生徒の情報について、会議では共有できている。しかし校務支援システム「日々の記録」の活用が、全職員に広まっていない。更なる活用を呼びかけたい。 ・保護者対象のアンケートにおいて、「意欲を引き出すような指導や支援～」の項目で、「十分できている」の回答は、53.5％となった。 ・ICT活用についての自主研修は、毎週1回30分程度の研修を、実施することが定着している。教え合いを中心とした研修内容となっている。 ・自立専科主催の研修は、教材の工夫について2回、応用行動分析学について3回の計5回実施できた。
「行きたい学校・行かせたい学校・働きたい学校」の実現	災害時に備え、ヘルプカードの情報について、担任間で共有する時間を設定する。 捜索事案が発生することを未然に防ぐ。また、事案発生時には組織的に対応するため学期に一度は全体確認を行う。 生徒アンケート（あおぞらアンケート）を定期的に実施し、児童生徒とのかかわりを深める。 職員全員が退校する「完全定時退校日」を徹底し、達成率80％以上とする。	・ヘルプカード（SOSカード）については、担任間での情報共有はできた。今後は学年間での共有へと広げたい。 ・捜索対象の事案については、5件程度発生した。組織的に対応することはできている。校外活動時の捜索事案について、更なる検討が必要である。 ・アンケート実施のみでなく、児童生徒の状況に合わせ、個人面談の設定を進めた。小学部では実施が難しかった。 ・「完全定時退校日」については、達成率は76.5％となった。定着は進んできたが、事案対応があると達成は厳しい。

学校関係者評価についての説明（評価委員からの意見・要望・改善に向けた提言等）

○児童生徒の情報共有については、校務支援システムの活用を呼びかけ、全職員に徹底する。
　⇒介護の現場でも同様で、入力作業に時間がかかるため、音声入力やＡＩの活用等を検討している。
○手厚すぎる初期対応については、担任が抱え込まないように、組織的に行う必要がある。
　⇒療育の現場では、全てについて報告が上がってこないと困るため、徹底を進めている。
○校外活動時の捜索においては、地域の協力を検討する必要がある。
　⇒地域で、高齢者の捜索についてネットワークを作っている段階である。生の松原特別支援学校も、ネットワークに参加してはどうか。
○長欠児童生徒の数は、通常の学校と比べてどのような割合か？
　⇒割合は多い。障がいの状況からコロナ不安での欠席後も、学校に戻れなくなった者もいる。関係各所とつないで、早急に対応する。
○あいさつ・接遇については、特別に指導を行わずとも、先輩の姿を見せることで、自覚せずとも当たり前となる面がある。
○児童生徒に対して、「させる」ではなく、お子さんたちに寄り添っている、先生方の接し方が素晴らしい。